

新潟県における配石墓の沈み込み事例の検討

加 藤 元 康

はじめに

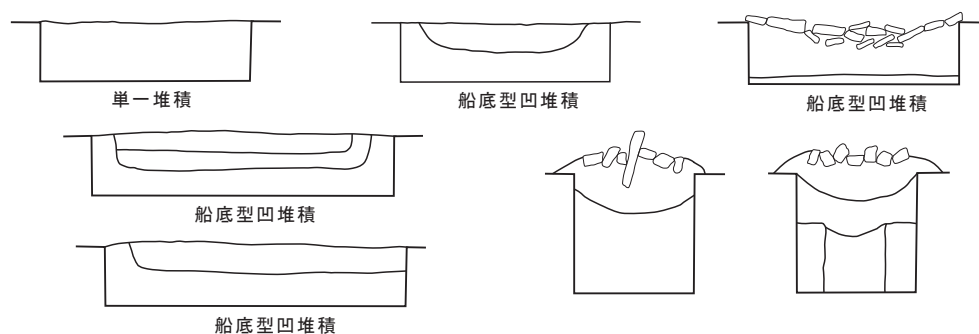
遺構の形態や堆積状況は遺構の機能を考えるうえで重要である。また、埋土の状況は機能終了から我々が発掘調査で遺構を検出するまでの過程の情報を有している。墓を研究する際に問題となるのは、あまたある遺構から墓を抽出することであるため、墓の認定条件が整備された [中村 1998]。しかし、実際には、墓と思われる土坑から遺物が出土せず、赤色顔料なども時期的に偏り、判断に苦慮する。そこで、かつて縄文人骨出土坑の堆積状況に注目したことがある [加藤 2000]。

葬墓制は、ヒトの死を扱う研究である。社会学者の見田宗介（真木悠介）は生と死の関係を時間認識の視点から語り、理論的な時間形態の基本を直線的な時間、円環的な時間、線分的な時間、反復的な時間に分類する [真木 1981]。筆者は過去の事象の認識構造はその文化の世界観を象徴していると考えている。過去・現在・未来の時間のなかでも過去は、世界観を構成する要素として、時代を超えて、儀礼や祭祀、神話や物語などに主要な題材で、ときにはひとつの場面として登場する。今でも過去の事象による伝承地や聖地が、神話や物語の語りによって、現在の人々に理解されるといった再生産の構造を持つことは周知のとおりである。縄文ランドスケープの二至二分も時間と世界観の関係性を示し、儀礼空間を演出する [小林 2002]。祭祀・儀礼を考古学的に研究する祭祀考古学の方法論を構築する要素として、谷口康浩は「モノ」「行為」「コンテクスト」の3つの観点が不可欠であるとする [谷口 2012]。墓には葬儀で利用される道具や副葬品などのモノ、土坑や配石、火葬などの行為、集落と墓域、世界観などの背景などが該当するであろう。また、葬墓制における時間についてはすでに溝口孝司や阿部友寿が論じている [溝口 1993・阿部 2003]。本稿でも影響を受けている、重要な視点である。

本稿では時間という問題設定のもと、配石墓を対象に上面の配石の沈み込み事例を取扱い、配石墓にまつわる行為に着目する。県内の土坑墓を集成した際に [加藤 2017]、上越市炭山遺跡配石1号が堆積状況と行為という筆者の着眼点に関係し、土器型式では読めない行為の時間差を示し、その行為復元は重要であると考えた。まずは基礎的な部分を確認し、各事例を検討し、炭山遺跡配石1号が持つ意味を述べる。

1 土坑墓・配石墓埋土の特徴

墓の内部に堆積する埋土は山口県内の事例を中心に論じたものが参考になる [山本 1989]。そこで示された堆積土の模式図のうち、墓壙に関する部分を図示した（第1図）。本論考では大規模土坑と土坑墓を対象に分析し、単一・水平・斜位・放物線型凹み・舟底型凹み・凸堆積の6つの類例があると述べ、次のように説明する。単一堆積は土坑墓に多く、埋戻しによるもの。水平堆積は埋め立てで、土坑の深部で雨水・流水が長期間滞水状態になる場合に認められる。斜堆積は自然流入によるもので、滞水作用で崩れる。放射線型凹堆積は全方位及び対角方位からの流れ込みで、滞水作用を受けなかった堆積である。舟底型凹堆積は平坦面の広い、皿形の堆積で、埋葬遺体や木棺が腐朽消滅することによって生じる陥没による堆積。凹みに偏りがある場合は、埋葬遺体の位置に関係する。凸堆積は崩落した土砂のブロック状堆積で、深い土坑の中央底面が盛り上がり、滞水状態にあまりならず、比較的短期間で上部に土砂が堆積したと考えら



第1図 土坑墓・配石墓の土層堆積模式図([山本1989]をトレース)

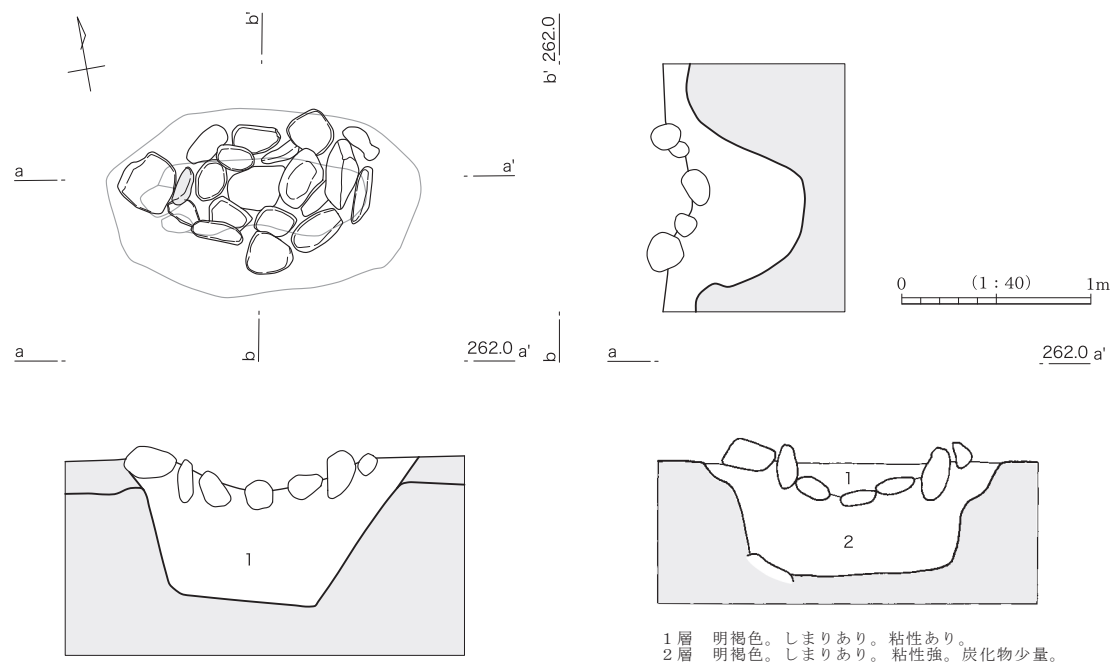
れるという。また、舟底型凹堆積で複数層に分かれる場合は上層に盛土があることが多いと指摘する。このように堆積には土坑 内部への流入・滞水などが作用し、埋葬遺体や木棺・石棺などの構造が影響することがわかる。

ヒトを含めた動物の骨が埋没後にどのような変化を被ったかを評価するタフォノミーの視点から、墓を分析した研究は土坑墓の埋没過程を考える上で参考になるため、確認する。

奈良貴史は遺跡から出土する遺体の骨の状況から、埋め土が被せられた充填環境か、棺や石室に埋葬された空隙環境かを判断することができるとし、近世墓を例にその注意点を述べている [奈良 2007]。青野はこの2つの環境を検討し、空隙環境から充填環境へ移行した部分的空隙環境を提示し、木棺の隙間から土砂が流入して充填環境となるような事例を「移行型」、甕被葬などの葬法によって生じて空隙から充填環境になるような事例を「当初型」と区別する。これらの環境判断を長野県北村遺跡の事例で検証し、枕石を伴う充填環境の埋葬人骨 (SH521) は、腐食で徐々に土砂に置き換わるが、全体的な沈み込みによって、下顎骨が胸部方向に下がることがあると述べる。また、甕被葬の事例 (SH784・SH1189) を検討し、この葬法は部分的空隙環境の要因となると指摘している [青野 2010]。この環境判断には土層断面との照合が重要であり、北海道有珠4遺跡 GP010 の検討では、遺構を覆う火山灰層にハの字状クラックと断層がみられることから、墓坑の陥没を示し、空隙環境にあったと判断している。しかし、このような状況は部分的空隙環境や充填環境時の遺体腐朽の沈み込みでも起きる可能性がないわけではないとする [青野 2017]。この埋葬事例によるタフォノミーの検討は、それに付随する着装品や副葬品などの出土状況や、墓の構造や墓に堆積する土層の状況の解釈にも影響する重要な視点である。

堆積状況やタフォノミーの視点に共通するのは埋葬遺体や木棺の腐朽による沈み込みを指摘していることである。新潟県内では縄文時代の貝塚遺跡が少なく、埋葬遺体が残りにくい。この遺体腐朽による沈み込みは、遺構断面から墓であることを検討する材料になる。上越市籠峰遺跡の配石で、「埋葬物が腐壊したため」傾斜していると記載し [中郷村教育委員会 1996]、池田淳子は、村上市元屋敷遺跡配石墓でこの現象を想定して、土坑埋土と配石の状況を詳細に観察し、10cm 程度のマウンドの存在、追加の埋土行為や配石などを指摘している [池田 2004]。墓を覆うマウンドは、青森県五所川原市五月女菰遺跡で明確な事例を検出している。マウンドを構成する粘土層は厚さ 10cm ～ 30cm 以上あり、晩期前葉の大洞 BC 式以降に増加する [五所川原市教育委員会 2017]。マウンドは元屋敷遺跡でも考えられるが、五月女菰遺跡では時期によって有無があることに注意を要する。

墓である土坑に埋葬遺体の腐朽による沈み込みが生じることが想定できることを確認した。この現象は籠



第2図 津南町道尻手遺跡2H-8号[津南町教育委員会2005]

峰遺跡や元屋敷遺跡の事例のように配石墓上面の敷石の傾斜が視認しやすい。そのため、この点に注目して県内事例を確認する。なお、配石墓の各配石の用語については周囲を区画する石を縁石、縁石内部に充填した石を敷石、亜角礫の長軸方向を上下にするのを立石、土坑壁面に配置した石を側石と呼ぶことにする。

2 配石墓敷石の沈み込み事例

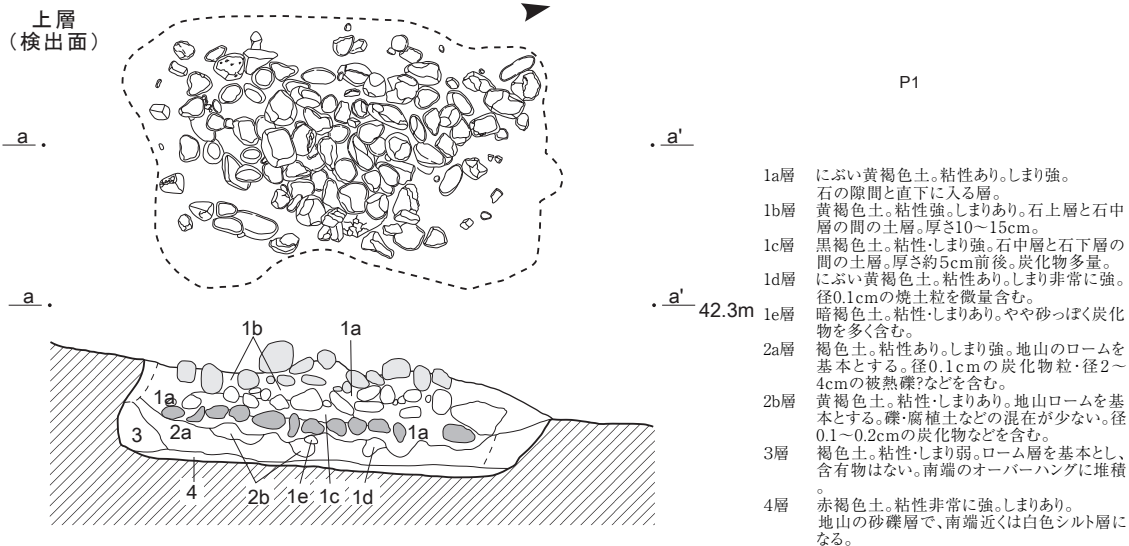
(1) 道尻手遺跡 [津南町教育委員会 2005]

津南町道尻手遺跡は信濃川流域に発達した河岸段丘の貝坂面北西端に位置している。遺跡の標高は260～262mで、信濃川河床面からの比高差は約65mである。遺跡の時期は縄文時代中期前葉～後期中葉で、中央広場を中心に、竪穴建物や長方形柱穴列、配石遺構群、埋設土器、土坑などが展開している。

配石遺構群は第1号～第3号のまとまりを認識し、半環状に配列し、時期は中期末～後期中葉である。配石墓は出土土器から後期初頭～中葉に継続的に造営している。後期中葉頃に環状内に建物が構築されることから、集落構造の変化とともに配石が改変された可能性を指摘している。配石には下部に土坑を持つものと、持たないものがある。なお、配石下の埋土は土壌洗浄を実施し、骨片などはなく、土器片や石器、炭化物などを採取している。

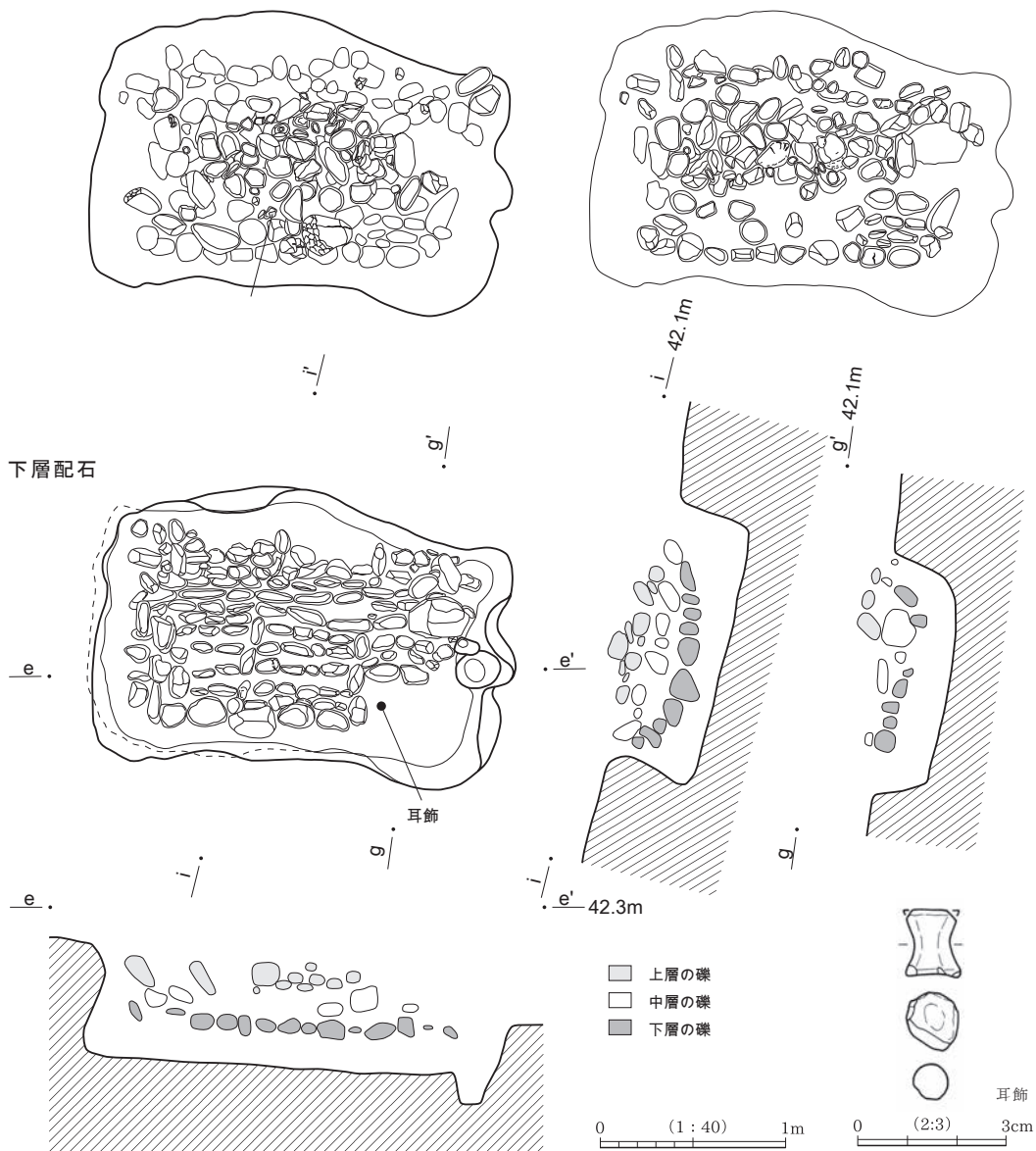
沈み込みは、2H-8号配石で認められる(第2図)。縁石を巡らせ、内部に扁平な敷石を配し、長軸の西端部に小形の礫の立石を置いている。敷石の落ち込みを、自然ではなく、構築時に意図して行なったと報告している。配石の規模は長軸1.32m、短軸0.76mで、下部の土坑は上面長軸2.63m、短軸0.96m、底面は長軸1.12m、短軸0.4mで、深度0.72mである。縁石両端を土坑上面に平坦に配石した高さに近似すると捉えた場合、中央の配石下面はそれより16cm下がっている。時期は加曽利B1式期並行期で、当遺跡の配石墓としては終わりの時期である。

当遺跡では約30基の配石遺構が確認され、その中には甕被葬で埋葬された土坑も含まれているが、敷石中央が沈み込む配石墓は本例のみである。



中層上部配石

中層下部配石



第3図 上越市炭山遺跡配石1号

（２）炭山遺跡〔新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団 2005〕

上越市炭山遺跡は、高田平野の西側の西頸城丘陵の先端部に位置している。遺跡の標高は 29 ～ 43 m で、南側と北側に東に流れる沢が、南側の沢の対岸には弥生時代の高地性集落である裏山遺跡が所在している。遺跡は縄文時代早期後半の集石と集石土坑群、後期後半の集落跡を検出し、前者は尾根の先端部を中心に、後者は尾根上の平坦面の東側縁辺部に展開している。

配石 1 号は、竪穴建物から少し離れた南西隅で検出した。土坑は長軸 2.20 m、短軸 1.47 m、深度約 0.5 m の長方形で、土坑北壁底面に深度 17cm のピットを検出している（第 3 図）。垂角礫・垂円礫 515 個を使用して、上・中・下層で配石を行い、そのうち、1 割程度の 55 個が被熱している。

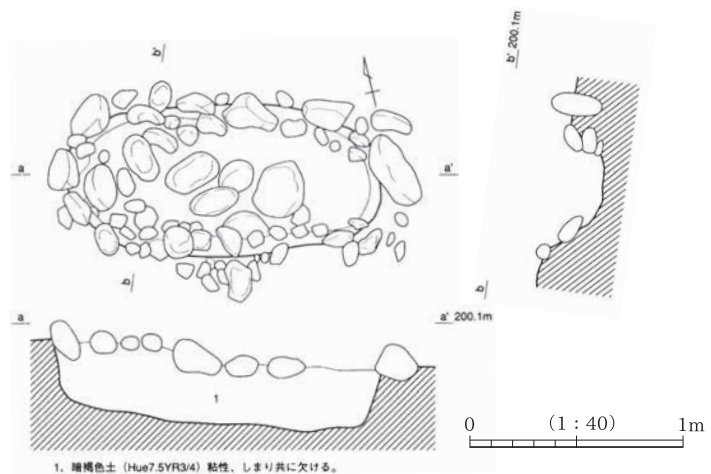
最も整った配石は下層で検出し、土坑の長軸方向に 11 列、短軸方向に 3 列の石列がある。石の長軸を列の方向に合わせるように置いている。下層と中層の間には 10 ～ 15cm の埋土が堆積している。中層下部の東側・西側の列状の石を配置し、土坑中央から西側は石の平坦面を上にして、土坑長軸方向に交互にはめ込むように列状に置いている。中層上部は上層の石の落ち込みと判断している。上層は中央部で重層的で、北東隅と南東隅に礫が少なく、厚みのある礫を多用している。

出土物は 1a 層・1c 層から後期中葉～後葉の土器片 5 点、土坑北東隅の 4 層から土製耳飾 1 点（第 3 図右下）が出土している。報告書では墓の可能性があると指摘している。下層の配石は配石墓としては非常に珍しい配列である。短軸方向の断面図では壁面際の縁石より中央の敷石が 5 ～ 12cm 程度沈んでいる。この沈み込みの範囲で耳飾が出土し、埋葬遺体の腐朽による影響と理解できる。下層配石と中層配石に間層があり、下層配石後の一定の期間の後に中層配石を構築したことがわかる。

（３）元屋敷遺跡〔朝日村教育委員会 2002〕

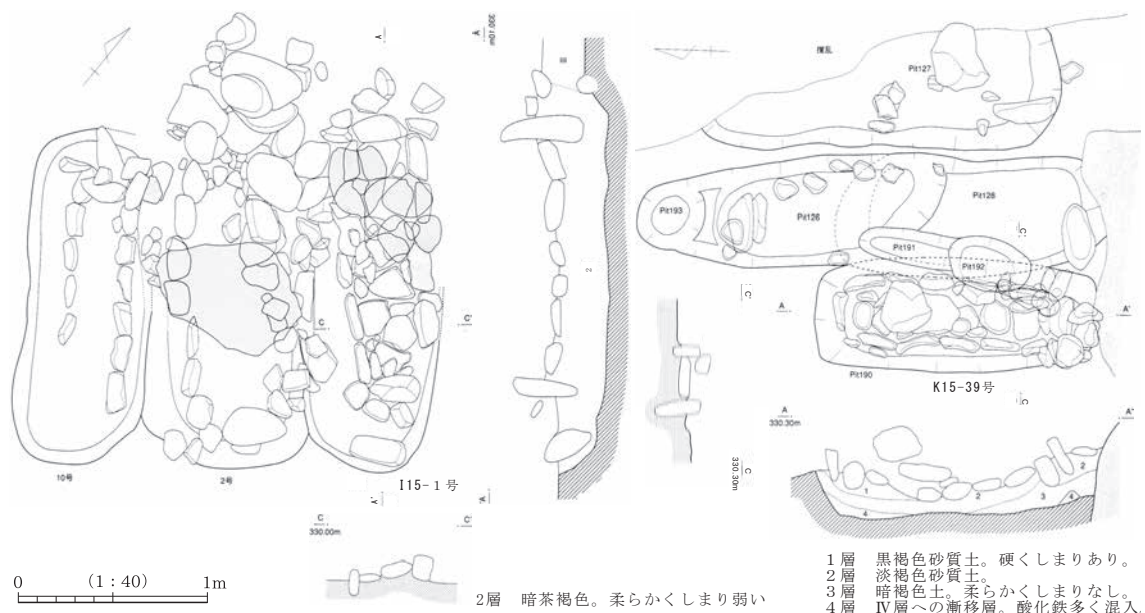
村上市元屋敷遺跡は朝日山地の西側にあたり、三面川の上流の河岸段丘に位置している。遺跡の標高は 198 ～ 200m と 191 ～ 194m で、2 つの段丘と斜面部に遺跡がある。縄文時代後期前葉～晩期末葉が主体で、上段の居住域、斜面部の土器捨て場、下段では生活痕跡を検出している。配石墓は上段の東側に集中している。地山に段丘礫を含み、配石墓の構築石材との区分が困難で、土坑上面に敷石を充填している配石墓が少ない。配石の沈み込みと判断できる遺構は配石墓 4108 がある（第 4 図）。

配石墓 4108 は縁石と側石を配置し、縁石内に敷石を持つ形態で、土坑は長軸 1.38m、短軸 0.5m、深度 0.2m である。長軸断面によると、西側の敷石が平行に並んでいるのに対して、土坑の中央の敷石の下面はそれよりも 8cm 下がっている。土坑埋土は単層で、粘性・しまりに欠けると説明する。詳細な時期は不明で、配石墓の多くは後期後葉～晩期前葉が主体とすることから、この時期と思われる。



第 4 図 村上市元屋敷遺跡配石墓 4108

〔朝日村教育委員会 2002〕



第5図 上越市籠峰遺跡(左:I15-1号、右:K15-39号) [中郷村教育委員会1996]

(4) 籠峰遺跡 [中郷村教育委員会 1996]

上越市籠峰遺跡は妙高火山の泥流堆積物が形成した緩傾斜面に立地している。遺跡の標高は330mで、西側には片貝川が流れている。掘立柱建物が環状に配置し、それらに重複せずに縄文時代後期後葉～晩期前葉の竪穴建物が分布する。当遺跡の配石墓は保存地区のほかに、2箇所集中する傾向があり、土坑の上面に長方形の石棺状の配石を設けることから、石棺状配石と呼称している。配石下に土坑を検出できなかった遺構もあるが、基本的には墓標と捉えられる。石棺状配石は遺跡全体で約80基を検出し、そのうち38基を調査している。

先述したように「埋葬物が腐朽したため」の傾斜や沈み込みの報告が、H15-1号配石、H15-12号配石、I15-1号配石、I16-2号配石、I16-3号配石、K14-1号配石、K15-4号配石、K15-27号配石、K15-37号配石、K15-38号配石、K15-39号配石、L16-41号配石である。時期は後期後半～晩期中葉以降までであり、主体は晩期である。これらのうち、K15-38号配石では下部遺構が検出されず、K15-40では下部に円形土坑が位置するものの、関連性はないとしている。その他については規模が判明したもの、浅い掘り込みがあるなど配石下部で土坑を確認している。沈み込みは敷石や下部土坑の中央付近に位置するものが6例(H15-12号・I16-2号・K14-1号・K15-27号・K15-37号・K15-39号)、全体もしくは東側や西側などどちらに偏在する場合は4例(I16-3号・K15-4号・K15-38号・L16-41号)、全体的に傾斜し、中央付近が沈むものが2例(H15-1号・I15-1号)ある。沈み込みの深度は深浅があり、縁石を原位置に近似すると仮定した場合、深い場合は13cm程度、浅い場合は4cm程度中央がくぼむ。これらの代表例としてI15-1号とK15-39号配石を図示する(第5図)。

I15-1号配石は、ほぼ全体を把握でき、規模は長軸2.15m、短軸0.5mで、下部の土坑は長軸2m以上、短軸約0.5mで、耳飾が出土している。H15-2号住居跡の埋没後に構築し、土坑の北側壁は不明瞭である。長軸方向の断面では縁石に近い敷石が中央に向かって傾き、中央の敷石は4cm程度下がる。短軸方向では南西側の縁石・敷石が下がっている。土坑埋土は柔らかくしまりが弱いと説明する。時期は晩期前葉以降かとしている。K15-39号配石は、敷石の中央付近の礫の沈み込みが顕著な事例である。配石は整えられた配置で、縁石を巡らせ、内部に敷石し、北側の敷石上面には蓋石状の扁平な河原石が置かれている。

南側は大形の火砕礫に接する。下部の土坑は長軸 1.5m、短軸 0.6 m、配石面からの深度は 0.1 ～ 0.25m である。長軸の縁石両端下面を当初の敷石に近似とした場合、中央の敷石下面までの深さは 12cm を測る。短軸断面では敷石の傾きが認められない。蓋石状の配石は、沈み込んだ敷石の上に位置し、長軸両端の縁石と同じ程度の高さに配置している。土坑埋土の南側に堆積する 3 層は柔らかくしまりがなく、1 層・2 層は砂質土で、1 層は固くしまりがあると説明する。時期は晩期初頭以降としている。

両者とも埋土に軟弱な土壌が堆積する。配石は重く、自然の沈み込みとも判断できるが、I15-1 号配石が浅く、K15-39 号配石が深く沈む。前者よりも後者が深いことは土層説明と調和せず、埋葬遺体の腐壊に伴って沈み込んだと考えられる。

3 沈み込みの有無と深度

配石が沈み込む事例は 4 遺跡で 15 例を確認した。時期は後期中葉の加曽利 B 1 式並行期以降、晩期まで認められる。沈み込みは 4 ～ 16cm 程度で、最も多く事例を確認した籠峰遺跡では 4 ～ 12cm の範囲にある。この計測値は本来の敷石標高が不明なため暫定値であるが、ばらつきが存在することはわかる。配石の沈み込み後に追加で配石を行った事例が炭山遺跡配石 1 号で確認でき、籠峰遺跡 K15-39 号配石の敷石上の蓋石状配石がその可能性がある。

まずはこの現象が埋葬遺体の腐朽によるものかが問題になるだろう。これまでの研究で確認したように、埋葬遺体によって生じた現象である可能性は高い。現に、炭山遺跡配石 1 号では沈み込みの範囲から耳飾が出土し、籠峰遺跡の事例でも耳飾が出土し、埋葬遺体を想定できる。では、配石墓数に比べて、事例数が少ないのはなぜだろうか。元屋敷遺跡のように上面敷石が敷き詰められておらず、判断できないこともあるが、埋葬遺体が想定できる甕被葬の道尻手遺跡 2H-2 号でも認められない。東北地方北半の配石墓を検討した渡辺清志は、墓上施設の配石遺構は土壌の埋め戻しに伴って、一挙に構築されたものがすべてではなく、数ヶ月か、長期にわたって段階的に実施されるより後半期の葬送儀礼で構築されるものが確実にあると述べる〔渡辺 1997〕。ここで扱ってきたように、遺体腐朽による沈み込み現象は腐朽前に配石行為を実施していることを意味する。そう考えるならば、池田〔2004〕が指摘するように腐敗による配石の落ち込みを仮定して、すべての土坑の上面に数 cm の盛土を想定する考え方もあるだろう。埋葬遺体の腐食には徐々に土砂が流入し、腐食部分が土壌に置き換わる現象が生じている。埋葬姿勢によってもその規模は異なると見込まれるが、遺体の腐壊による沈み込みを仮定した場合、多くの配石に高さの乱れが生じられると思われる。遺体の腐敗速度は皮膚・筋・靱帯・内臓などで一様でなく、内臓が腱や靱帯よりも早く消失するという〔奈良 2007〕。充填環境の場合、砂質土のほうが粘質土よりも腐食した部分に入りやすいとの指摘〔青野 2010〕もある。遺体腐敗による影響は、土質や水分などの土壌の状況に左右されられると考えられるが、多くの配石墓に認められない理由は今後の課題である。

4 追加配石行為

炭山遺跡配石 1 号について若干考えてみたい。当事例では下層の配石後に遺体腐朽による敷石沈下が生じ、配石上に土壌が堆積する時間を経て、追加で配石行為が行われている。同様に明確な事例は管見の限り他になく、籠峰遺跡でその可能性が指摘できるのみである。追加配石の行為は明らかに当初の配石と時間差がある。阿部友寿は、縄文時代後期・晩期の墓坑と配石の関係を検討し、明らかに意図的・意識的に、墓坑を部分的に利用しつつ、上部配石を構築して、その後も埋葬と配石行為を繰り返しながら、長期的に

場所を利用する行為を「遺構更新」と呼んでいる〔阿部 2003〕。墓を形成し、間断なく、ときには並行して、配石墓の礫を再利用して構築した短期形成と、下部土坑構築後に一連の行為として配石が実施され、供伴する遺物から型式的に長期的な行為を判断できる長期形成がある。炭山遺跡では配石 1 号以外に配石遺構がなく、早期の集石のみである。被熱した礫を使用していることから早期の集石を配石に再利用している可能性があるが、本事例を複数の事象と時期を対象として設定された「遺構更新」として捉えるには異論があるかもしれない。しかし、追加配石の行為の背景には同じような世界観が存在しているように思う。大きく異なるのは、埋葬された特定の故人の墓に対して実施していることである。当遺跡では他の墓を検出していないため、配石の被葬者がどのような存在かを検討できないが、追加配石は被葬者及び被葬者に対する記憶を呼び覚ますことを生じさせたと考える。追加配石が一回生のものなのか、複数回実施されたかの判断はなかなか難しいが、中層と上層の配石は積石状で、中層下部では中央から西へ 1 列ずつはめ込むような並びがあるという。宮尾亨は複数の岩石の集合による単位配石や配石で構成される環状列石の各岩石の配置には構築順序が存在し、自ずと時間の経過があると述べる〔宮尾 2011〕。配石状況と配石単位の関係から、中層と上層の配石は複数回実施された可能性が考えられる。

おわりに

本稿では配石墓に見られる沈み込みに着目した。その現象が埋葬遺体の腐朽によるもので、後期中葉以降晩期まで確認できることがわかった。そのなかで、敷石沈下後に追加配石を実施している炭山遺跡配石 1 号を取り上げ、その行為の意味するところを述べた。この行為は時間概念からすると円環的もしくは反復的な時間の概念に関係するかもしれない。同様な事例が少ないことが課題である。原因を探るためにも、このような視点からの調査が待たれる。なお、本稿は平成 30 年 3 月 18 日に開催した講演会の内容の一部を発展させたものである。

引用・参考文献

- 青野友哉 2010 「人骨の出土状況による遺体周辺の環境判断と方法論的妥当性について」『Anthropological Science』第 118 巻第 1 号、日本人類学会
- 青野友哉 2017 「社会復元のための人骨・遺物による埋葬環境判別法」『理論考古学の実践』Ⅰ 理論篇、同成社
- 朝日村教育委員会 2002 『元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』朝日村文化財報告書第 22 集
- 阿部友寿 2003 「縄文後晩期における遺構更新と「記憶」」『神奈川考古』第 39 号、神奈川考古同人会
- 池田淳子 2004 「配石墓の構築に関する一視点」『三面河流域の考古学』第 3 号、奥三面を考える会
- 加藤元康 2000 「縄文時代土壙墓の認定条件の提案」『大崎考古』第 4 号、立正大学考古学研究会
- 加藤元康 2017 「新潟県における縄文時代墓制の基礎資料集成」『研究紀要』第 9 号、新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 五所川原市教育委員会 2017 『五月女菰遺跡』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第 34 集
- 小林達雄 2002 「縄文 ランドスケープ」『縄文ランドスケープ』ジョーモネスクジャパン機構
- 谷口康浩 2012 「祭祀考古学は成り立つか」『祭祀儀礼と景観の考古学』國學院大學伝統文化リサーチセンター
- 津南町教育委員会 2005 『道尻手遺跡』津南町文化財調査報告第 47 輯
- 中郷村教育委員会 1996 『籠峰遺跡発掘調査報告書』
- 中村大 1998 「亀ヶ岡文化における葬制の基礎的研究（1）」『國學院大學考古学資料館紀要』第 14 輯、國學院大學考古学資料館
- 奈良貴史 2007 「近世考古学と形質人類学」『近世・近現代考古学入門』慶應義塾大学出版会
- 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団 2005 『蛇谷遺跡・炭山遺跡』
- 真木悠介 1981 『時間の比較社会学』岩波書店
- 溝口孝司 1993 「「記憶」と「時間」- その葬送儀礼と社会構造の再生産において果たす役割」『九州文化史研究所紀要』第 38 号、九州大学文学部九州文化史研究施設
- 宮尾 亨 2011 「記念物としての配石」『考古学ジャーナル』No. 612、ニューサイエンス社
- 山本一郎 1989 「土坑埋積類型」『周陽考古学研究所報』第 4 集、周陽考古学研究所
- 渡辺清志 1997 「東北地方北半における配石墓の成立と展開（上）」『古代文化』第 49 巻第 2 号、古代学協会